

Chausuduka

茶臼塚 1 号 墳

福岡県八女市立花町北山所在古墳の確認調査報告書
八女市文化財調査報告書 第 1 3 9 集

2 0 2 3

八女市教育委員会

Chausuduka

茶臼塚 1 号 墳

福岡県八女市立花町北山所在古墳の確認調査報告書

八女市文化財調査報告書 第 1 3 9 集

2 0 2 3

八女市教育委員会

序

八女市立花町は市域の矢部川以南に位置しており、これまでに多くの古墳や横穴墓が発見されています。その中で唯一の前方後円墳が、八女市立花町北山に所在する茶臼塚1号墳であり、立花町域を代表する重要な遺跡のひとつです。

本報告書は、茶臼塚1号墳の保存を目的として、平成29年度から令和3年度までに行った確認調査の成果報告です。

茶臼塚1号墳の調査では、現在の古墳周辺の地形測量を行った他に、初めて部分的に掘り下げての発掘作業を行いました。その結果、古墳の本来の規模や築造方法を知るための手がかりを得られました。

立花町域には他にも、市指定史跡である大塚古墳や浦田古墳など多くの古墳が存在しています。今後、茶臼塚1号墳を含めた古墳の調査を行い、古墳時代に立花町域に暮らしていた人々の実態が判明していくことが期待されます。

このたび発掘調査報告書を刊行するにあたり、本書が学術的資料として活用されるのはもちろんのこと、文化財の保護や理解普及の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査や報告書作成にあたり、ご協力いただきました地権者の松尾正隆様、稲員博行様、地元の方々、並びにご指導・ご助言をいただきました方々に心より感謝の意を申し上げます。

併せて、今後とも八女市の埋蔵文化財行政にご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

令和5年3月31日

八女市教育委員会

教育長 橋本 吉史

例言

- ・本書は八女市が国・県補助を受けて平成 29・30、令和元・3 年度に実施した、八女市立花町北山所在の茶臼塚 1 号墳の確認調査報告書である。
- ・本書では、本古墳の名称を現在の遺跡名称である「茶臼塚 1 号墳」とする。
- ・本書の遺構実測図で使用する方位は座標北を基準とする。
- ・本書で使用した遺構実測図は、発掘担当者の指揮のもと調査参加者で作成した。本書掲載の遺物実測図の作成、遺構実測図および遺物実測図の製図は、令和 4 年度に八女市文化財整理室において、甲斐郁・江頭俊介・整理作業員が実施した。
- ・本書掲載の写真は、遺構写真を甲斐が、遺物写真を永田寧が撮影した。空中写真撮影は有限会社空中写真企画に業務委託を行った。
- ・本文中の TP は試掘坑の略称である。
- ・確認調査に際しては、福岡県教育委員会文化財保護課の方々のご指導・ご協力を得たことを記して謝意を表す。
- ・発掘調査時の現場図面・写真等の記録類および出土遺物等は八女市教育委員会で保管している。
- ・本書の執筆・編集は八女市文化振興課職員の助言のもと、甲斐が行った。

本文目次

1. 調査の経過	
(1) 調査に至る経緯と経過	1
(2) 調査体制	2
2. 遺跡の位置と環境	4
3. 調査の概要と成果	
(1) 調査の概要	7
(2) 墳丘の現状観察	9
(3) 墳丘の確認調査	10
(4) 出土遺物	13
(5) 墳丘の復元	17
(6) 茶臼塚 1 号墳の総括	18

挿図目次

第 1 図	茶臼塚 1 号墳位置図 (S = 1/1, 250, 000)	4
第 2 図	茶臼塚 1 号墳周辺遺跡図 (S = 1/25, 000)	5
第 3 図	茶臼塚 1 号墳周辺図 (S = 1/2, 000)	6
第 4 図	茶臼塚 1 号墳墳丘測量図 (S = 1/300)	8
第 5 図	茶臼塚 1 号墳 1・2 TP 実測図 (S = 1/100)	11
第 6 図	茶臼塚 1 号墳 3・4・5 TP 実測図 (S = 1/100)	13
第 7 図	茶臼塚 1 号墳出土遺物実測図① (S = 1/4)	15
第 8 図	茶臼塚 1 号墳出土遺物実測図② (S = 1/4)	16
第 9 図	茶臼塚 1 号墳出土遺物実測図③ (S = 1/4)	17
第 10 図	茶臼塚 1 号墳墳丘復元図 (S = 1/400)	19

表目次

第 1 表	茶臼塚 1 号墳出土遺物観察表	20
-------	-----------------------	----

図版目次

図版 1	茶臼塚 1 号墳の立地
図版 2	茶臼塚 1 号墳の全景・墳丘周辺
図版 3	茶臼塚 1 号墳 1 TP ①
図版 4	茶臼塚 1 号墳 1 TP ②
図版 5	茶臼塚 1 号墳 2 TP
図版 6	茶臼塚 1 号墳 3 TP・4 TP
図版 7	茶臼塚 1 号墳 5 TP
図版 8	茶臼塚 1 号墳出土遺物①
図版 9	茶臼塚 1 号墳出土遺物②
図版 10	茶臼塚 1 号墳出土遺物③
図版 11	茶臼塚 1 号墳出土遺物④

1. 調査の経過（第1図）

（1）調査に至る経緯と経過

茶臼塚1号墳は八女市立花町北山字茶臼塚2913-3、2928-3・9・7・4に所在する。八女市域において、矢部川以南で確認される唯一の前方後円墳である。

古墳が所在する丘陵周辺は過去に段々畑として利用されており、開墾した際に耳環や人物埴輪・円筒埴輪が出土したということが伝えられている（立花町史編さん委員会1996）。

昭和58年には地形測量を実施しており、当時の測量成果によると古墳の規模は、主軸長34.5m、見かけの後円部径約23m、前方部幅22m+ α であり、前方部の西側は採土により破壊されていた。表面採集により、須恵器の器台破片1点と円筒埴輪の破片1点が発見されており、時期は6世紀中葉と判断されている。また、北西に前方部を向けることが八女古墳群の前方後円墳でも見られる共通点として言及され、立花茶臼塚1号墳出土のものと思われる人物埴輪が立山山古墳群出土の埴輪との類似性が指摘されている（川述1984・立花町史編さん委員会1996）。

調査地は私有地であり現在の地権者に拠れば、この測量調査後に古墳周辺の土地には産業廃棄物が置かれ、竹が繁茂する等土地が荒れていた時期があったため、その産業廃棄物の撤去や、竹藪の伐採を行い、周辺地の美化作業を行ったとのことである。ただし、その作業に伴って、測量調査時には不意に地形が大きく改変された箇所があることが明らかであった。八女市教育委員会でも平成26年度にこの地形の変化に気付き、地権者にも古墳の重要性を伝え、保護に関し協議を重ねてきた。

このように昭和58年の地形測量調査から、約30年が経過し古墳周辺の地形改変が進行したことから、古墳の保存を目的とした現況地形の把握および、古墳の規模・形状等の範囲確認調査が必要と判断した。

調査実施前には地権者の了解を得て調査地に立ち入った。また、墳丘上や周辺の畑等で採集された埴輪片の提供を受けた。

平成29年度に、現況の古墳周辺地形を把握するために測量調査を実施した。この測量成果を踏まえて、平成30年度から令和3年度は古墳の範囲確認を目的とした試掘・確認調査を実施した。

平成30年度は、墳丘が残存する可能性が高い古墳東側に試掘坑（1TP）を設定し調査を行った。令和元年度は1TPを拡張したほかに、墳丘部分に2TPを設定し調査を行った。令和3年度は3・4・5TPを設定し調査を実施した。各試掘坑で写真・図面の作成等の記録を作成し、出土遺物の取り上げを行った。

整理作業は令和4年度に実施し、出土遺物の洗浄・注記・復元・作図・写真撮影および調査時の図面・写真記録の整理を行い、本報告書を作成した。

(2) 調査体制

本報告に掲載する遺跡発掘調査時の調査体制は以下の通りである。

【平成 29 年度】（現地調査時）

（調査主体）

八女市教育委員会

教育長		西島 民生
教育部長		永溝 弘幸
文化振興課	課 長	持丸 末喜
同	文化財保護係長	中川 寿賀子（総括）
同	主 任	永田 寧
同	係 員	檀 佳克
同	係 員	渡部 真弓（事務担当）
同	係 員	甲斐 郁（調査担当）
同	嘱 託	多賀 晴司

【平成 30 年度】（現地調査時）

（調査主体）

八女市教育委員会

教育長		橋本 吉史
教育部長		永溝 弘幸
文化振興課	課 長	持丸 末喜
同	文化係長	中川 寿賀子（総括）
同	主 任	永田 寧
同	係 員	檀 佳克
同	係 員	馬渡 洋平（事務担当）
同	係 員	甲斐 郁（調査担当）
同	嘱 託	多賀 晴司

【令和元年度】（現地調査時）

（調査主体）

八女市教育委員会

教育長		橋本 吉史
教育部長		井手 勇一
文化振興課	課 長	久間 政幸
同	参事補佐兼文化係長	中川 寿賀子
同	主 任	永田 寧
同	係 員	檀 佳克
同	係 員	馬渡 洋平（事務担当）
同	係 員	甲斐 郁（調査担当）

【令和3年度】（現地調査時）

（調査主体）

八女市教育委員会

教育長	橋本 吉史
教育部長	原 信也
文化振興課 課 長	鵜木 英希
同 課長補佐兼文化振興係長	森田 尚美
同 参事補佐兼文化財係長	
兼歴史文化交流館係長	片山 あづさ（総括・事務担当）
同 係 員	檀 佳克
同 係 員	甲斐 郁（調査担当）
同 係 員	木原 堯
同 会計年度任用職員	平 俊隆

【令和4年度】（整理作業時・本報告刊行時）

（調査主体）

八女市教育委員会

教育長	橋本 吉史
教育部長	平 武文
文化振興課 課 長	鵜木 英希
同 課長補佐兼文化振興係長	森田 尚美
同 参事補佐兼文化財係長	
兼歴史文化交流館係長	片山 あづさ（総括・事務担当）
同 主 任	永田 寧
同 係 員	檀 佳克
同 係 員	江頭 俊介
同 係 員	甲斐 郁（整理・報告担当）
同 係 員	木原 堯
同 会計年度任用職員	平 俊隆
同 会計年度任用職員	平島 昌美

2. 遺跡の位置と環境(第2図・第3図)

八女市は福岡県南部に位置し、市域は矢部川水系の上流域から中流域に当たる。立花町域は八女市南西部の矢部川南岸に位置し、今回報告する茶臼塚1号墳は八女市立花町北山字茶臼塚に所在する。

立花町域には、矢部川へ向かって流れ込む複数の支流が存在する。矢部川支流の白木川と辺春川の間に位置する平野部周辺の低丘陵地には、複数の古墳・横穴墓が集中する。茶臼塚1号墳は白木川の約600m東側にあり、立花町域のほぼ中央にある飛形山から北西に派生する丘陵上の一角に位置する。現状では、古墳南側約50mには道路が通り分断されているが、もともと南東から北西方向に延びる丘陵の北西端に墳丘が所在する。

古墳の頂上に上ると北側に矢部川、そのさらに北、茶臼塚1号墳から北側約5.6kmに岩戸山古墳を含む八女古墳群が所在する八女丘陵が眺望できる。

茶臼塚1号墳の近隣には、現在では消失して詳細は不明であるが、4基以上の古墳があったとされる(茶臼塚古墳群)。その他にも周辺には、市指定史跡大塚古墳を含む上ノ原古墳群などが所在する。大塚古墳は調査の結果、三段築成の円墳で周溝まで含めると直径約38mを測り、出土遺物から古墳の時期は6世紀後半と推定されている。地山整形により墳丘の1段目を造り、2・3段目に盛土を行う。(川述1984)。

道路を挟んで南東側には、もとは茶臼塚1号墳と同一丘陵上に小倉谷横穴墓群が存在していたが、現在は消失している。小倉谷横穴墓群は発掘調査の結果、南側に開口する横穴墓が26基発見されており、築造は6世紀中頃から始まる(佐々木1999)。

谷を挟んで北東に位置する丘陵の先端には六所宮古墳群が存在し、さらに谷を挟んで北東に谷中古墳群が存在する。これらの古墳は内容確認調査が行われておらず詳細は不明である。

古墳時代の集落遺跡については、北山今小路遺跡では弥生時代から古墳時代初頭の竪穴建物が多く見つかっているが、5～6世紀の竪穴建物も20棟前後発見されている(伊崎1993)。白木西原遺跡では17基の古墳と6世紀後半代の竪穴建物が発見されている(伊崎1995)。

茶臼塚1号墳に伴う集落遺跡は現時点で明らかになっていないが、古墳から視認できる範囲に位置していたとするならば、北西の矢部川沿いの平野部に存在していた可能性がある。



第1図 茶臼塚1号墳位置図 (S = 1/1, 250, 000)

【参考文献】

- ・川述昭人編 1984『大塚古墳』立花町文化財調査報告書第1集 立花町教育委員会
- ・伊崎俊秋編 1993『北山今小路遺跡Ⅰ』立花町文化財調査報告書第6集 立花町教育委員会
- ・伊崎俊秋編 1995『白木西原遺跡Ⅱ』立花町文化財調査報告書第8集 立花町教育委員会
- ・立花町史編さん委員会編 1996『立花町史』上巻 立花町
- ・佐々木隆彦他編 1999『小倉谷横穴墓群』立花町文化財調査報告書第10集 立花町教育委員会



- | | | | |
|------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 茶臼塚1号墳 | 13. 谷中古墳群 | 25. 松ノ本遺跡 | 37. 袴田遺跡 |
| 2. 小倉谷横穴墓群 | 14. 曲松古墳群 | 26. 島田遺跡 | 38. 池上遺跡 |
| 3. 大塚古墳 | 15. 稲荷山横穴墓群 | 27. 長田遺跡 | 39. 野田遺跡 |
| 4. 上ノ原古墳群 | 16. 野広尾横穴墓群 | 28. 石町遺跡 | 40. 二反田遺跡 |
| 5. 白木西原遺跡 | 17. 枯木谷古墳群 | 29. 宮ノ前遺跡 | 41. 京田遺跡 |
| 6. 山下横穴墓群 | 18. 上の山横穴墓群 | 30. 宿町遺跡 | 42. 深田遺跡 |
| 7. 北山今小路遺跡 | 19. 中通横穴墓群 | 31. 水洗遺跡 | 43. 鳥井遺跡 |
| 8. 今出坂古墳 | 20. 鬼隈横穴墓群 | 32. 新替遺跡 | 44. 篠原遺跡 |
| 9. 小路古墳 | 21. アモメ遺跡 | 33. 打越遺跡 | 45. 立野・大坪遺跡 |
| 10. 六所宮古墳群 | 22. 国伏遺跡 | 34. 中里遺跡 | |
| 11. 笹が平古墳 | 23. 向田遺跡 | 35. 大坪遺跡2次調査 | |
| 12. 北山八竜遺跡 | 24. 茶ノ木ノ本遺跡 | 36. 大坪・前田遺跡 | |

第2図 茶臼塚1号墳周辺遺跡図 (S = 1/25, 000)



第3図 茶臼塚1号墳周辺図 (S = 1/2, 000)

3. 調査の概要と成果

(1) 調査の概要

今回、古墳の範囲内容確認を目的として、平成 29 年度に墳丘測量調査を実施し、続けて平成 30 年度～令和 3 年度は試掘・確認調査を実施した。以下で各年度の調査の概要について述べる。

【平成 29 年度】平成 29 年 6 月 26 日～9 月 29 日

茶臼塚 1 号墳について、墳丘周囲も含め現状地形を把握するために測量調査を実施した。測量調査前に草刈り作業を行い、地形の形状を観察した。墳丘測量調査では、墳丘上に 2 点の基準点 A1・A2 を設定した他に調査地内の 6 箇所に任意の杭を設定し、トラバース測量を実施した。その後、それらの基準点をもとに、現状の墳丘を含めた周囲約 9,000 m²の範囲で平板測量を実施し縮尺 100 分の 1 で平板測量図を作成した。測量調査の結果、古墳北側・西側は近年に大きく削平されており、南側は段々畑の造成時に改変を受けているため、東側が古墳築造時の状況を留めている可能性が高いことを確認することができた。

【平成 30 年度】平成 31 年 2 月 26 日～平成 31 年 3 月 31 日

前年度の測量調査結果を踏まえて、古墳の規模・残存長を確認するために試掘坑を設定し、墳丘の確認調査を実施した。墳丘が残存する可能性が高い後円部東側に試掘坑（1 TP）を設定した。その結果、試掘坑西側は既に削平を受けている状況が確認され、試掘坑東側で小礫が直線的に並ぶ石列を発見した。この石列が古墳の一部の可能性があるとされた。石列の時期・性格の確認と、当初の目的である墳端の把握という課題が残った。

また、古墳の現状を記録するために、墳丘を中心とした空中写真撮影を行った。

【令和元年度】令和 2 年 3 月 2 日～令和 2 年 3 月 31 日

前年度の調査では墳端が把握できなかったため試掘坑（1 TP）の東側・西側を延長し、確認調査を実施した。1 TP 東側で溝状遺構を確認し、埴輪片・須恵器片とともに葺石と思われる円礫が出土したため、古墳に伴う周溝である可能性が高いとされた。1 TP 西側に新たに設定した試掘坑（2 TP）では、墳丘積み土と思われる土層を確認し、墳丘の残存が確認できた。前年度に確認された石列は、1 TP を南側に拡張したところ石の間に埴輪片が挟まることから、古墳築造後の遺構であると判断された。1 TP で確認された溝状遺構が古墳の周溝であるか検討する作業が残された。

また、古墳の周辺地形や付近の大塚古墳等を含めた広範囲を対象に空中写真撮影を行った。

【令和 3 年度】令和 3 年 5 月 31 日～令和 4 年 3 月 31 日

令和元年度に墳丘東側で確認した周溝の検証を行うため、墳丘北東側・南東側に新たに試掘坑（4・5 TP）を設定した。また、墳丘の状況を確認するために墳丘東側に試掘坑（3 TP）を設定した。墳丘北東側の 4 TP では溝状遺構の痕跡もしくは近年の地形改変を受けた痕跡である傾斜変換点が確認された。墳丘南東側の 5 TP では既設の 1 TP で確認された周溝と同一の可能性が高い溝状遺構を確認した。

調査後は遺跡の保護と安全に考慮して、土嚢で埋め戻しを行った。

以下では、調査成果の詳細について記す。



第4図 茶臼塚1号墳墳丘測量図 (S = 1/300)

(2) 墳丘の現状観察 (第4図)

茶臼塚1号墳の調査では、まず墳丘周囲の現状を観察するために地形測量調査を実施した。始めに過去に実施した測量調査成果を記し、その後今回の調査成果を述べる。

①過去の地形測量

茶臼塚1号墳では昭和58年に測量調査が実施されている(川述1984)。当時の地形測量によると、主軸長34.5 m、見かけの後円部径約23 m、前方部幅 $22\text{ m} + \alpha$ となると判断された。

調査時の所見では、前方部が北西方向を向くが前方部の西側コーナーは採土により破壊されており、その崖面となった墳丘端部には河原石の葺石が見られることから、葺石をもった古墳であることが判明している。また、墳丘頂部周辺に陥没が見られ、開墾時に遺物が出土していることから主体部は盗掘等で人の手が及んでいる可能性が述べられている。

この測量時には既に、古墳の周辺は開墾により過去に段々畑として、地形改変があったことについて言及されている。ほぼ墳丘部分のみの測量のため、広範囲な当時の地形を確認することは困難であるが、当時から既に古墳の西側は削られており崖になっていた状況と、古墳の南側には段々畑の痕跡と思われる石垣が確認できる。

②今回の地形測量

平成29年度に古墳を含む周囲の現況を把握するために墳丘測量を実施した。測量調査では、墳丘上の2箇所基準点A1・A2を設定し、調査地内の6箇所任意の杭K1～K6を設定し、閉合トラス測量を行った。その基準点をもとに、平板測量を行い墳丘周囲の測量図面を作成した。

前述の遺跡の位置と環境でも触れている通り、茶臼塚1号墳は飛形山から北西に派生する丘陵に位置しており、この丘陵はもともと南東から北西方向に延びていたが現在は道路により分断されている。

現状で墳丘後円部は形を留めているが、過去の測量時とは異なり前方部はその形状を判断できなくなっている。西側の崖面がさらに削れてしまったこと、および墳丘北側が削平されたことが原因と思われる。

古墳の西側崖面上には円礫が見えており、過去の調査所見通り葺石の可能性はある。段々畑の痕跡として、南側2箇所の石垣の他に墳頂北西部の円礫と墳丘東側の石垣を確認した。墳丘東側には近年平坦面が造成され、享保などの江戸時代の年号が刻まれた墓石が移設されている。墳丘頂部に巨石等が存在しており、墳頂には平坦面が確認できる。現状では平坦面は長さ約7.5 m、幅約4.5 mの楕円形を呈している。

以上の通り、古墳の北側および西側は築造当時の状況を留めておらず、南側は段々畑開墾時の改変を受けていることが明らかとなった。一方で、墳丘東側は削平されている箇所があるものの、平場の造成で盛土が行われている可能性が高い箇所があった。このため、古墳範囲の確認調査のために墳丘東側を中心に試掘坑を設定し調査を行っていくこととした。

(3) 墳丘の確認調査

試掘坑 (第4～6図)

計5箇所に試掘坑を設定し、古墳の範囲確認調査を行った。各試掘坑の位置は第4図に示す。第5図に1・2TPの平面図と土層図、第6図に3～5TPの土層図を示す。以下、各試掘坑について説明する。

基本土層

まず、古墳周辺の基本土層を記す。墳丘周辺の観察および試掘・確認調査により、茶臼塚1号墳が位置する丘陵は、表土層の下位に赤褐色粘土層、粘土と岩盤層の片岩由来の礫が混じる層、片岩の岩盤層があることが判明した。この岩盤層には青灰色のものと、赤色のものがあり、赤色片岩の上に青灰色片岩の層がある。概ね丘陵の西側は赤色片岩のみで、東側に青灰色片岩が見られる。

1TP (第5図A-A'、B-B'、C-C')

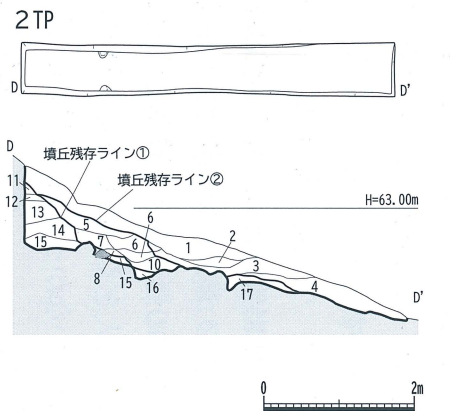
墳丘東側に後円部端を確認することを目的として、想定主軸に沿った東西方向に設定した試掘坑である。全長約15.3m、幅0.8～1.2mである。平成30年度から掘削を行い、以後拡張を繰り返した。第5図に平面図と土層断面図を示す。土層断面図は3箇所の土層図を合成しており、第5図の太線より下位が岩盤層および自然堆積層である。

試掘坑西端(第5図A-A')では、現代の盛土層直下で岩盤層を確認した。この岩盤層は西から東へ急に下降した後に平坦に近くなっている。岩盤の下端の高さは標高約60.2mである。不自然な平坦面であることから、人為的に改変を受けたものと思われる。現状では平場が広がり始める箇所に当たる。この平坦面は古墳築造より後世に削平を行い、平場を広げたものである可能性と、岩盤層を削り出して墳丘を造った可能性がある。

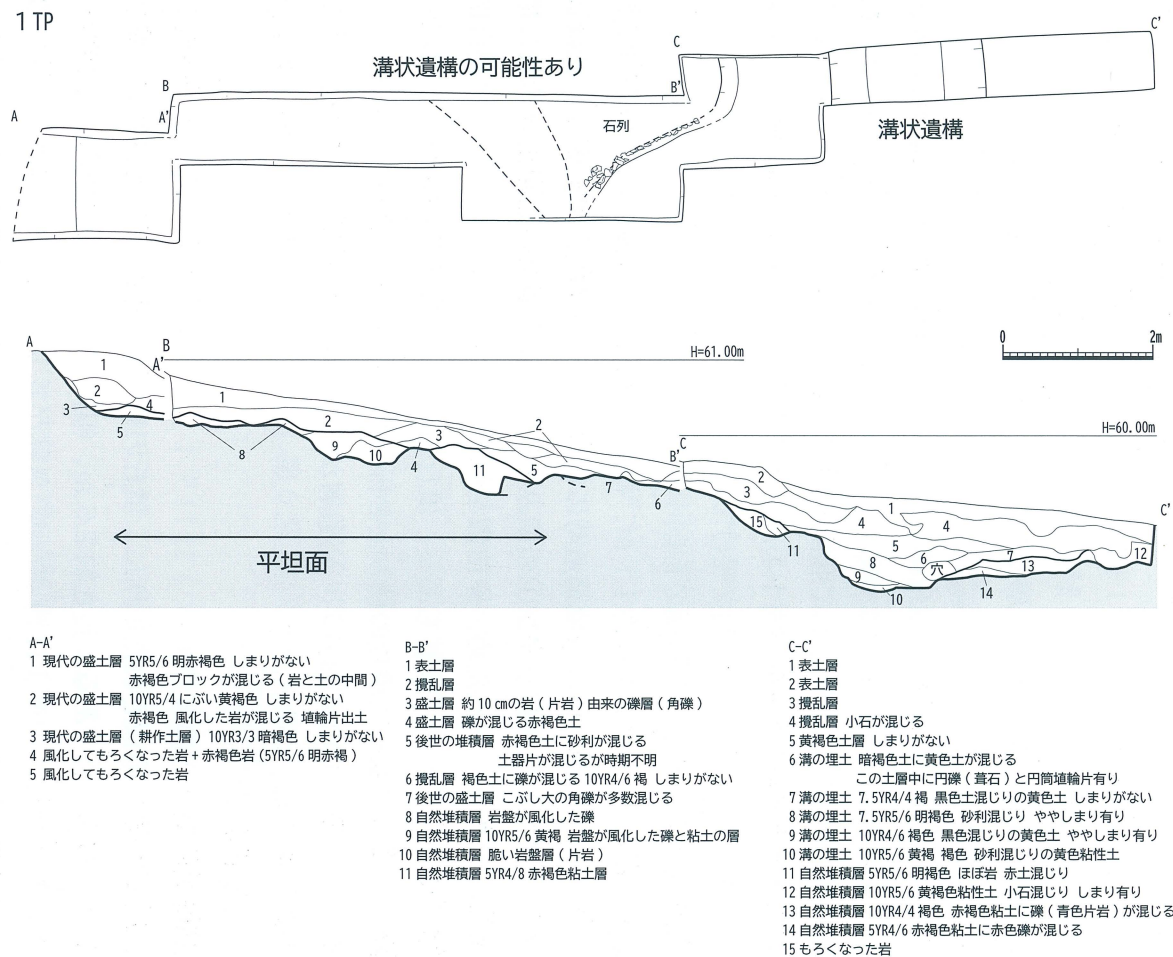
平坦面は試掘坑西端から約6m続いており、平坦面上面は岩盤層から粘土層へ変化する。この粘土層は断面土層では窪んだ岩盤層の上に堆積している(第5図B-B'土層11)。溝であった可能性があるが、しまりのある粘土層で黒色土も混じらないため、自然堆積であると判断した。平面上では、最大幅約1.2mで北西から南東へ延びている。南側の幅が狭く、溝としてはいびつな平面形状をしている。確認された深さは北壁で約60cm、南壁で約40cmであり、均一ではない。

溝の可能性のある粘土層の東側には、こぶし大の角礫が多数入る土層が岩盤層の直上にある(B-B'土層7)。自然堆積土層ではなく、人為的な盛土と思われる。この付近に10cm大の角礫を直線的に並べた石列を確認した。石列の礫の下から埴輪片が出土したため、古墳築造より後世のものである可能性が高い。石列自体の性格は不明である。

試掘坑東端では、岩盤層が東へ下降していき、溝状の遺構を確認した(第5図C-C'土層6～10)。溝の底面は岩盤層もしくは礫まじり粘土層で標高約58mである。溝の東側の岩盤直上の土層13・14はしまりが強く、粘土に礫が混じる土層であることから、溝の埋土ではなく自然堆積層と判断した。この土層13・14が立ち上がることから、溝の東端とした。溝の幅は約2.1mで、残存する深さは約60cmである。溝は岩盤層を掘削して造られている。溝からは多数の円礫とともに埴輪片が出土した(第7図1・11、図版8(1)・図版9(11))。埴輪片は、溝の埋土(C-C'土層6)掘削時に地表面から約70cmの深さで土層に対して平行に出土した。同じ土層中から埴輪片より明確に新しい時期の遺物は出土していない。約15cmの埴輪片で器表面全体が摩耗する。埴輪片が出土した下位でも円礫が出土し、溝がある程度埋没した後に落ち込んできたと思われる。



- D-D'
- 1 表土層 7.5YR4/6 褐色 しまりがない土
 - 2 表土層 根カクラン
 - 3 表土層 10YR3/4 暗褐色 しまりがない
 - 4 表土層 10YR4/4 褐色 しまりがない
 - 5 表土層 10YR3/4 暗褐色 やや黒色土が混じる
 - 6 攪乱層もしくは積み土 暗褐色土
 - 7 攪乱層もしくは積み土 やや黒色土が混じる
 - 8 攪乱層もしくは積み土 土層 15 と類似する 黄褐色土
 - 9 攪乱層もしくは積み土 黒色土が混じる
 - 10 攪乱層もしくは積み土 7.5YR4/6 褐色 やや黒色土が混じる
 - 11 墳丘の積み土 7.5YR5/6 明褐色 赤褐色土 10 cm以下の礫を含む
 - 12 墳丘の積み土 10YR5/4 に近い黄褐 灰色土 礫が多く含まれる
 - 13 墳丘の積み土 赤褐色土に礫を含む
 - 14 墳丘の積み土 黄褐色土
 - 15 墳丘の積み土 10YR5/8 黄褐 明褐 粘土に 5 cm以下の礫（片岩）が混じる
 - 16 自然堆積層 黄褐色 岩由来の礫が混じる
 - 17 自然堆積層 10YR5/6 黄褐色 岩の間の土



第5図 茶臼塚1号墳1・2TP実測図（S = 1/100）

2TP（第5図D-D'）

墳丘東側の基準点A1・A2の延長上に、墳丘の状況を確認することを目的として令和元年度に設定した試掘坑である。長さ約5m、幅約70cmである。第5図に平面図と土層断面図を示す。土層断面図は調査時に南壁で作成したが、1TPとの土層の比較を行うために反転して掲載している。土層図の標高は1TPと合わせているが、試掘坑間の距離は任意である。

試掘坑西端では、水平に堆積する土層が確認され、墳丘の積み土と判断した（D-D'土層11～16）。水平に堆積する土層上面を強調しているのが第5図D-D'の墳丘残存ライン①である。墳丘残存ライン①は、かなり急な角度で墳丘端としてはやや不自然である。確実な積み土と判断したこのラインより上の土層は、黒土が混じっている。後世の攪乱の可能性もあるが、墳丘積み土の可能性が残るため、墳丘残存ライン②として強調した（D-D'土層5～10）。積み土の下位には片岩の岩盤層がある。試掘坑東端から西へ約1.4mまでの範囲は表土層直下で岩盤層（青色片岩）が露出し重機の爪痕があるため、近年の掘削を受けている。

西端から東へ約0.7～2.2mの範囲で掘削中に円礫が多数出土した。ほぼ表土や攪乱層から出土し原位置を保っていない。西端から約1.1m、標高約62.2mの位置では岩盤層直上の両方の壁際で確認した円礫もある。円礫自体は古墳築造時に使用した石の可能性が高い。当初は葺石として原位置を保つと考えたが、墳丘残存ライン①の積み土（D-D'土層15）に入り込む。墳丘最上段の基底石としては小ぶりの石であるため、原位置を保っていない可能性が高い。墳丘は既に削平されており、後で落ち込んだ葺石の可能性もある。墳丘残存ライン②を想定した場合には、完全に積み土の内部に存在することになり、墳丘の積み土を行う際の目印とした可能性がある。

2TPの西端では積み土の下には片岩の岩盤層があり、墳丘の西端は岩盤の上に積み土を行い墳丘の築造をしたと思われる。

3TP（第6図E-E'）

墳丘東側の近年平坦に造成された箇所に、墳丘の残存状況および葺石の状況を確認するため、令和3年度に設定した試掘坑である。長さ約2.6m、幅約60cmである。

試掘坑内では、赤色片岩の直上に約40cmの角礫が並ぶ石列を確認した。ほぼ一直線に並ぶ可能性が高く、古墳の葺石ではなく後世に設置された可能性が高い。土層断面では石の直上に表土の黒土が混じる土が堆積していることから古墳築造よりも後に置かれた石である可能性が高い。

4TP（第6図F-F'）

1TP東端で溝状遺構を確認後に、墳丘北東側で溝を確認するため、令和3年度に設定した試掘坑である。

1TPと同様な溝は確認できず、表土・攪乱土層の直下で岩盤層（赤色片岩）が確認された。試掘坑西端から約1.8mの位置で、標高約58.3mとなり、1TPの溝底部の標高に近い高さであるため、溝が削平された可能性がある。4TPが位置する墳丘北東側の斜面は傾斜が急で、試掘坑の西端から約2.4mで岩盤層は急角度で下降し始める。後世の改変を大きく受けていると思われる。もともと急傾斜地であったために、古墳築造時から周溝がめぐっていなかった可能性も残る。

5TP（第6図G-G'）

4TPと同様に1TPで確認した溝状遺構を、墳丘南東側で確認するため、令和3年度に設定した

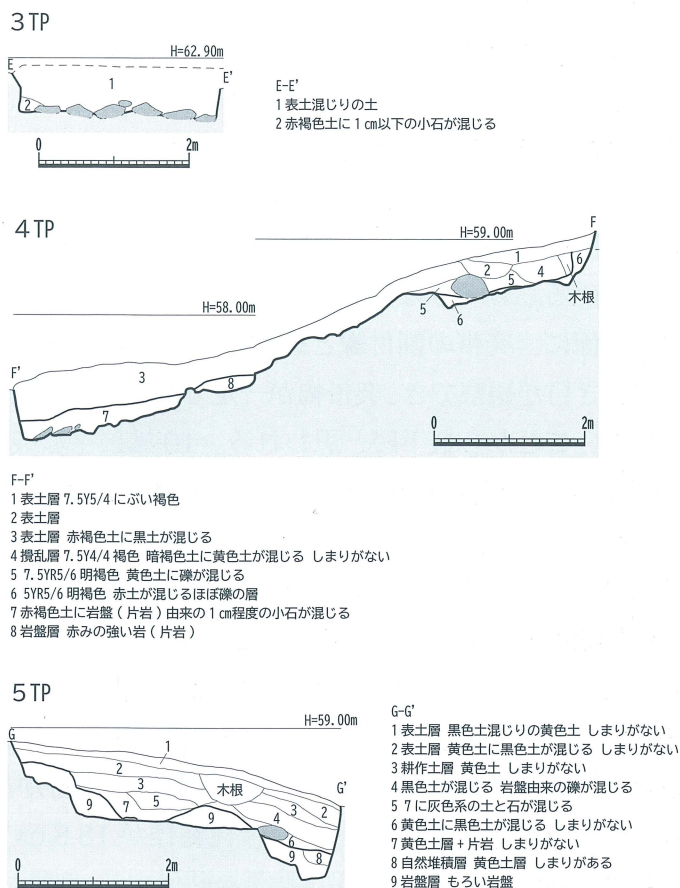
試掘坑である。

1 TP と同様な溝は確認できず、表土層・攪乱土層の直下で岩盤層（青色片岩）が確認された。この岩盤層は北側・南側で立ち上がっている（第6図：土層9）。底面の高さは標高約 57.8 m であり、1 TP の溝底部の標高に近い。溝の上部は開墾時の掘削のためか削平され、溝の下部の痕跡のみが残された可能性がある。

（4）出土遺物

出土遺物は埴輪・土師器・須恵器が発見されている。試掘坑出土分と、表面採集により発見された分がある。

1 TP 出土遺物のうち、出土位置を細別して取り上げたものは 1 TP-A ～ 1 TP-D として整理して第7図に示した。以下では、出土量の最も多かった埴輪から報告する。



第6図 茶臼塚1号墳3・4・5 TP 実測図
(S = 1/100)

1 TP 出土埴輪（第7図）

第7図は 1 TP から出土した円筒埴輪である。1・11 は 1 TP 溝状遺構の埋土（1 TP-D）から出土した。2～4・6 は 1 TP-C、5 は 1 TP-A から出土した。この他、7～10 は細別して取り上げていない 1 TP 出土の埴輪片である。

1 は復元口径 27.8cm の外反する口縁部片であり、断面形が M 字状の突帯を有する。器表面は激しく摩耗している。2～10 は突帯を有する胴部片である。2～4 は突帯断面形が台形を呈する。4 には円形の透孔が残存する。5～8 は突帯断面が M 字状である。5～7 には円形の透孔が残存する。5 は透孔穿孔時にはみ出した粘土が一部切り取られる。6 は透孔の壁に筋状の痕跡があり、刀子等で穿孔した際についたと思われる。透孔とは別に器壁を貫通する径 5 mm の孔がある。7 は透孔の穿孔時に複数回工具を当てた痕跡がある。9・10 は最下段の突帯を有する胴部片と思われる。9 は突帯断面形が三角形に近い台形で、突帯下端のナデが丁寧でない。10 は復元最大径 20cm で、突帯は扁平である。11 は復元底径 18cm の底部片であり、透孔・突帯は残存しない。外面に板状工具で強くナデを施す。内面には指によるナデを行い、粘土継ぎ目を指で押さえる。底部には倒立させて指で押さえた痕跡がある。器表面は激しく摩耗している。1・2・5・11 には胎土に 7 mm 以下の小石が含まれる。

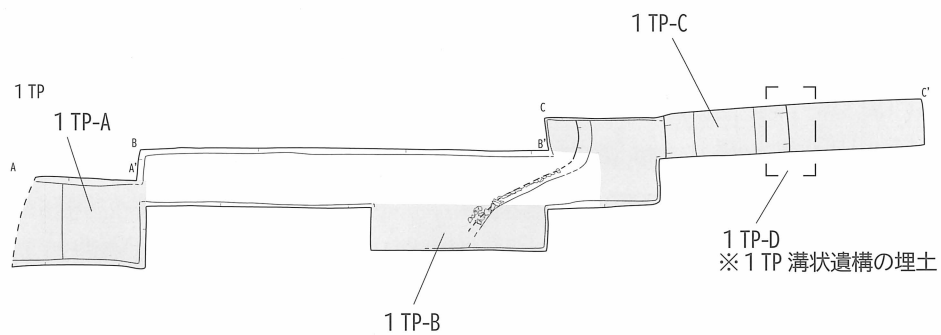
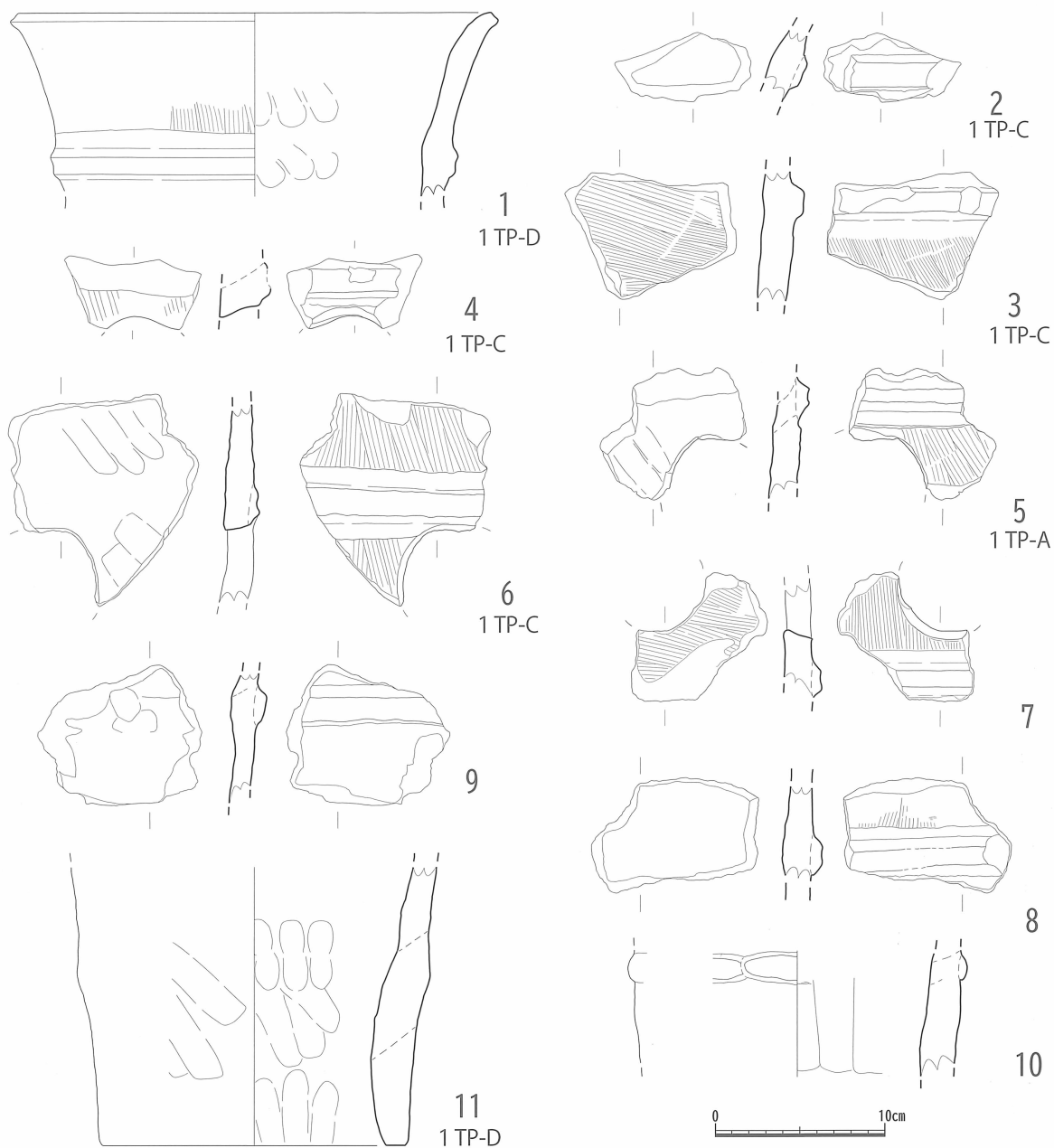
表面採集埴輪（第8図1～15）

第8図1～15 は現地表面より採集された円筒埴輪である。1 は復元口径 28.6 cm の外反する口縁部片である。口縁先端はつまんで成形し、ナデを施す。外面に縦方向のハケメを施す。器表面は摩

耗を受けている。2は円形の透孔を有する胴部破片である。復元最大径は21.4 cmである。上下両端が粘土継ぎ目で剥離している。透孔穿孔時にはみ出した粘土が内面に残る。3～10は突帯部を有する胴部破片で、3～7は突帯断面が台形である。3は突帯貼付後に突帯上下端に横方向のナデを行い、丁寧に継ぎ目が消される。7は内面に強いナデのため工具痕が残る。その後指によるナデを行う。5・6は円形の透孔が残存する。5は透孔穿孔時に内面へはみ出した粘土を指で押さえて整える。外面は劣化により調整不明である。6は突帯断面形が角が立つ台形である。突帯下端の接合が見えている。8・9は突帯形状が扁平であり、最下段の突帯であると思われる。8は突帯が剥離した器表面に、突帯の割付線と思われる沈線が残される。突帯の押さえは上下ともに甘い。9は突帯のつなぎ目が観察でき、突帯幅が一定でないなど仕上げが粗雑である。突帯が扁平なことに加え、器壁が厚いことから最下段と思われる。10は扁平な突帯を貼付後に上下端を工具により押圧する。11～15は底部である。11・12は底部小破片である。11は器表面が激しく摩耗している。外面にナデを施し、内面に縦方向の指によるナデを行う。底部端は指で押さえる。12は口縁部の可能性があるが、13の底部形状と類似するため底部と判断した。13・14は後円部での表面採集で発見された。13は復元底径が16.4 cmである。底部先端が細くなり、内面に明確ではないが稜線がある。外面に縦方向のハケメを底部端まで行う。内面に粘土紐を円形にした時の縦方向の継ぎ目が残る。内面は指で押さえた後にナデを行う。底部端はナデを行う。14は底径が16.4 cmである。底部に向かって器壁が薄くなる。底面には平坦な場所に置いた痕跡がある。外面に縦方向のハケメ、内面にナデを施す。底部端はナデを施す。15は復元底径が18.8 cmである。透孔・突帯が残存する。外面に縦方向のハケメを施した後に、扁平な突帯を貼付する。突帯には縦方向の粘土継ぎ目が見られる。貼付後、突帯上下端を工具により押さえつけ、突帯表面にはハケメを施す。外面の突帯より下位に板状工具によるナデを施した後に、その痕跡をナデにより消している。内面にはハケメを施す。底部は指で押さえることにより、先端が薄くなり内面に稜線を有する。

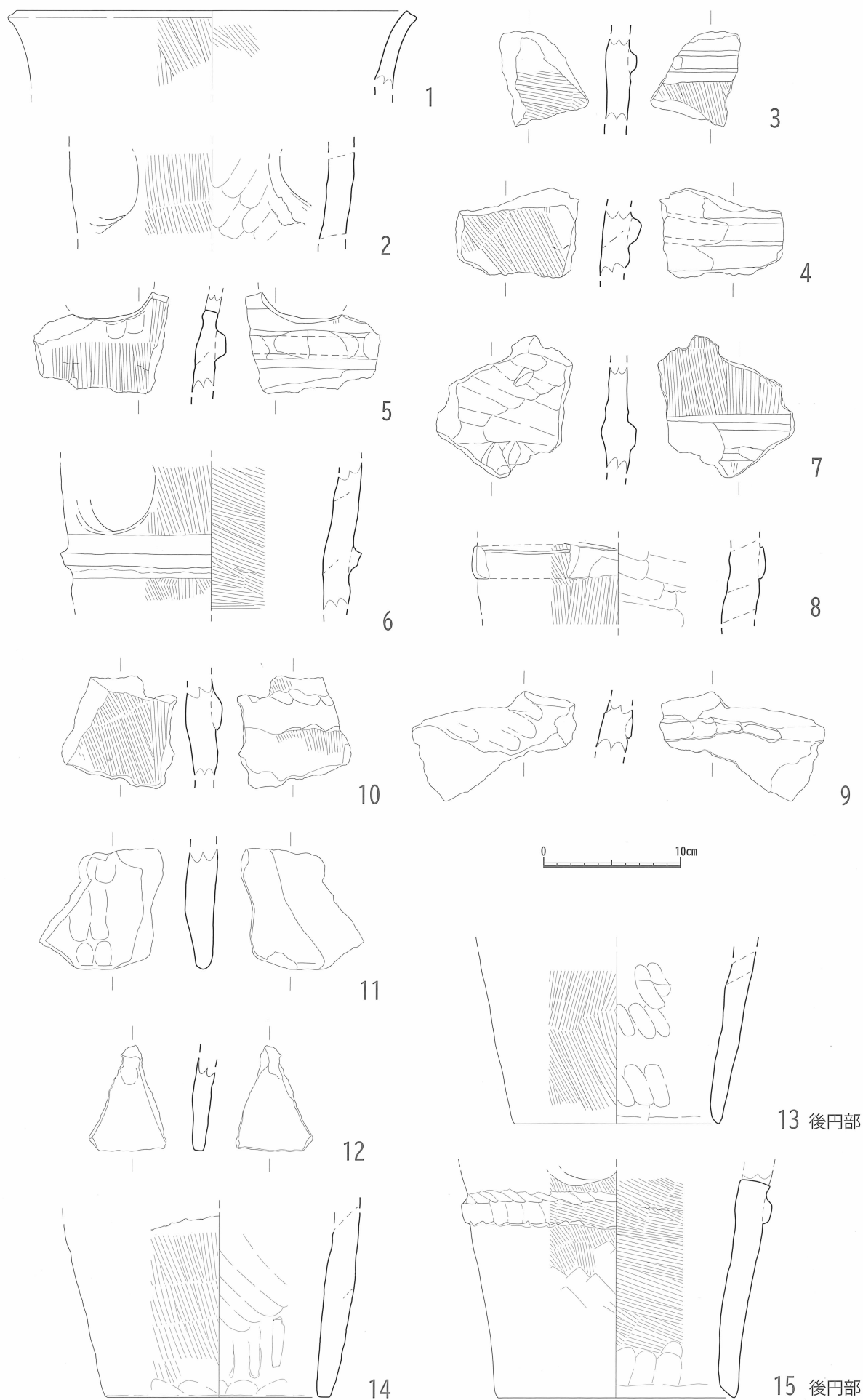
その他出土遺物（第9図16～20）

第9図16～20に埴輪以外の遺物を示す。16は5 TPの表土層から出土した。埴輪の可能性もあるが、他の埴輪片と比べ胎土に砂粒を多く含み、硬く焼けている。また、円筒埴輪片としては器壁が薄く、形象埴輪片の可能性も残るが土師器と判断した。端部が赤化しており、熱を受けた可能性がある。17は1 TP-Aから出土した。土師器の高坏屈曲部の小破片である。18～19は須恵器の破片である。すべて甕であると思われる。18は東側斜面での表面採集である。外面が劣化している。厚みが増えるため頸部付近の破片である可能性がある。内面に同心円文タタキを施す。19は1 TP-Bから出土した。外面に粘土紐の輪積痕が見られる。外面に格子目タタキ、内面に同心円文タタキを施す。20は1 TP-Cから出土した。外面に格子目タタキを施し、内面にナデを行う。

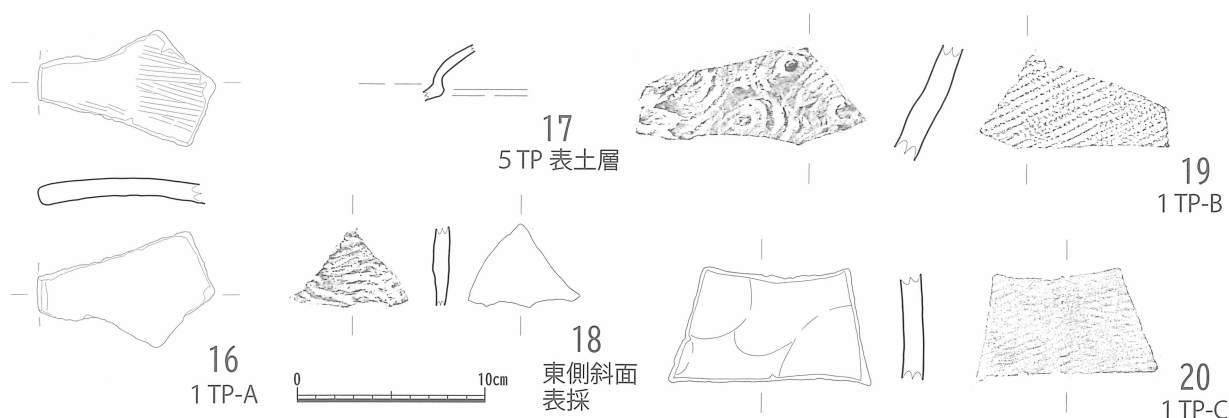


1 TP 出土遺物取り上げ細別場所

第7図 茶臼塚1号墳出土遺物実測図① (S = 1/4)



第8図 茶臼塚1号墳出土遺物実測図② (S = 1/4)



第9図 茶臼塚1号墳出土遺物実測図③ (S = 1/4)

(5) 墳丘の復元 (第10図)

ここで、今回の測量調査による地形観察と、試掘・確認調査による土層観察・遺物出土状況を踏まえ、墳丘を復元したい。

試掘・確認調査の結果、2 TP 東端では近年の削平を受けている岩盤層が確認され、1 TP 西側では人為的に造成された平坦面を確認した。これらのことから、立花茶臼塚1号墳は削平を受けている可能性が高く、築造時の墳丘は現状よりも長大であった公算が高い。

また、1 TP では2箇所周溝の可能性のある土層・遺構を確認した。外側の溝では、埋土から器表面が摩耗した大きさ約15 cmの埴輪片が多数の円礫とともに出土していることから、築造後に墳丘上から落ち込み一気に埋没したと思われ、古墳に伴う溝の可能性が高い。

さらに、本古墳の前方部は旧状を留めておらず、昭和58年調査図面を参考に墳丘の復元を検討する他ない。そこで、今回の測量図面と方位および南側の石垣を基準に合成する作業を行った。

後円部の復元では、まず、外側の溝(1・4・5 TP)を通る復元円を検討したが、円の中心が現在の墳頂より大きく東側にずれ正円にならなかった。次に、内側の溝は1箇所(1 TP)でしか確認できておらず、後円部復元円を導き出すために、昭和58年調査図面を基に主軸を仮設定した。その後、外側の溝を概ね通り、中心が主軸と重なる円を復元した(第10図後円部①)。この円の中心を後円部中心として仮設定し、内側の溝を通る円を復元した(第10図後円部②)。また、1 TPの西端では、岩盤の落ち際が確認され東に向かって平坦面が造成されている。この岩盤落ち際を墳丘端として、後円部②と同様に仮の後円部中心から復元した(第10図後円部③)。周溝と仮定した後円部①と後円部②は、復元円が現状の崖面に及んでいる。しかし、現地での観察では、崖面で溝を確認できず、墳丘の周囲全てに溝が巡っていなかった可能性が高い。このため、後円部①が墳端となる可能性は低い。後円部③は、平坦面が後世の削平を受けており、最大で後円部②までであった可能性がある。

前方部については残存しないため、周辺古墳の形状から復元を試みた。前方部形状を比較し、昭和58年調査図面の前方部形状に近いものを抽出した。その結果、岩戸山古墳・丸山古墳・釘崎2号墳・中ノ城古墳の4基と形が類似し、その中でも釘崎2号墳の前方部形状が本古墳と最も類似している。これを参考に、後円部②・③と前方部を合成した(第10図前方部②・前方部③)。後円部③を墳端とした場合は、後円部径約26 m、前方部長17 m、前方部幅26 m、墳長40 mとなる。削平を受けている可能性があるため、最大では後円部②を墳端とした場合の、後円部径約37 m、前方部長25 m、前方部幅38 m、墳長約58 mとなる。これにより墳長は40 m以上と推測される。

(6) 茶臼塚 1 号墳の総括

茶臼塚 1 号墳は八女市域の矢部川以南で確認できる唯一の前方後円墳である。古墳が所在する丘陵では過去の開墾時に遺物が出土したと伝わる。昭和 58 年に地形測量を実施し、規模は後円部径約 23 m、前方部幅 22 m 以上、墳長 34.5 m とされ、採集された須恵器片から時期は 6 世紀中葉と判断された。前方部の方向が八女丘陵所在の前方後円墳と同じ傾向を示す点と、人物埴輪の表現技法が立山山古墳群出土の埴輪と類似する点が指摘されている。近年、古墳周辺の地形改変が進んだため、地形測量調査および試掘・確認調査を実施し、現状記録と古墳の範囲内容確認を行った。

①墳丘規模

本古墳の墳丘については、昭和 58 年調査図面や今回の測量図面から後円部は細長い丘陵上という地形の制約を受け、正円形よりは楕円形であった可能性がある。また、積み土と岩盤削り出しにより墳丘を築造しており、付近に所在する大塚古墳でも見られる築造方法である（川述 1984）。

墳丘規模は前述したように、後円部東側の岩盤落ち際を墳丘端とすると後円部径 26m に復元できる。前方部は周辺古墳（岩戸山古墳・丸山古墳・釘崎 2 号墳・中ノ城古墳）の形状を比較し最も類似する釘崎 2 号墳の形状を参考に、前方部長 17m、前方部幅 26m、墳長 40 m と推定した。削平を受けている可能性が高いため、最大で後円部径 37 m、前方部長 25 m、前方部幅 38 m、墳長 58 m となる可能性もある。なお、古墳東側で確認された溝状遺構は、古墳に伴う可能性が高いが、古墳全体に巡る周溝ではなかったと思われる。

②出土遺物の時期・古墳築造時期

今回の出土遺物には、埴輪・土師器・須恵器があり、埴輪の出土量が最多である。全て円筒埴輪であり、確実に形象埴輪と言える破片は確認できなかった。

今回図化した円筒埴輪には、外反する口縁部片が 2 点ある。底部片は 6 点で復元底径 16.4 ～ 18.8cm であり、5 点に底部倒立調整の痕跡がある。外面に二次調整は見られない。突帯断面形は台形・M 字形・扁平があり、突出は 5 mm 前後が多い。扁平な突帯は最下段の可能性が高く、2 点で押圧技法が見られる。また、突帯貼付前に割付線を施すものがある。確認できた透孔はすべて円形で、器壁の調整でケズリは確認されなかった。

概ね川西編年 V 期の特徴を示すが IV 期の要素も見られる。全体形が分かる資料は無いが、突帯間隔設定を行う IV 群の要素を持ち押圧技法が使用されるため、川西編年 V 期の九州の埴輪を細分した小嶋氏の分類では、IV 群系 A 類（押圧）に相当する。

このことから、川西編年 V 期、小嶋分類 IV 群系 A 類（押圧）に相当する円筒埴輪が樹立されていたと思われ、埴輪の時期は 6 世紀中葉である。古墳築造時期も 6 世紀中葉であったと思われる。

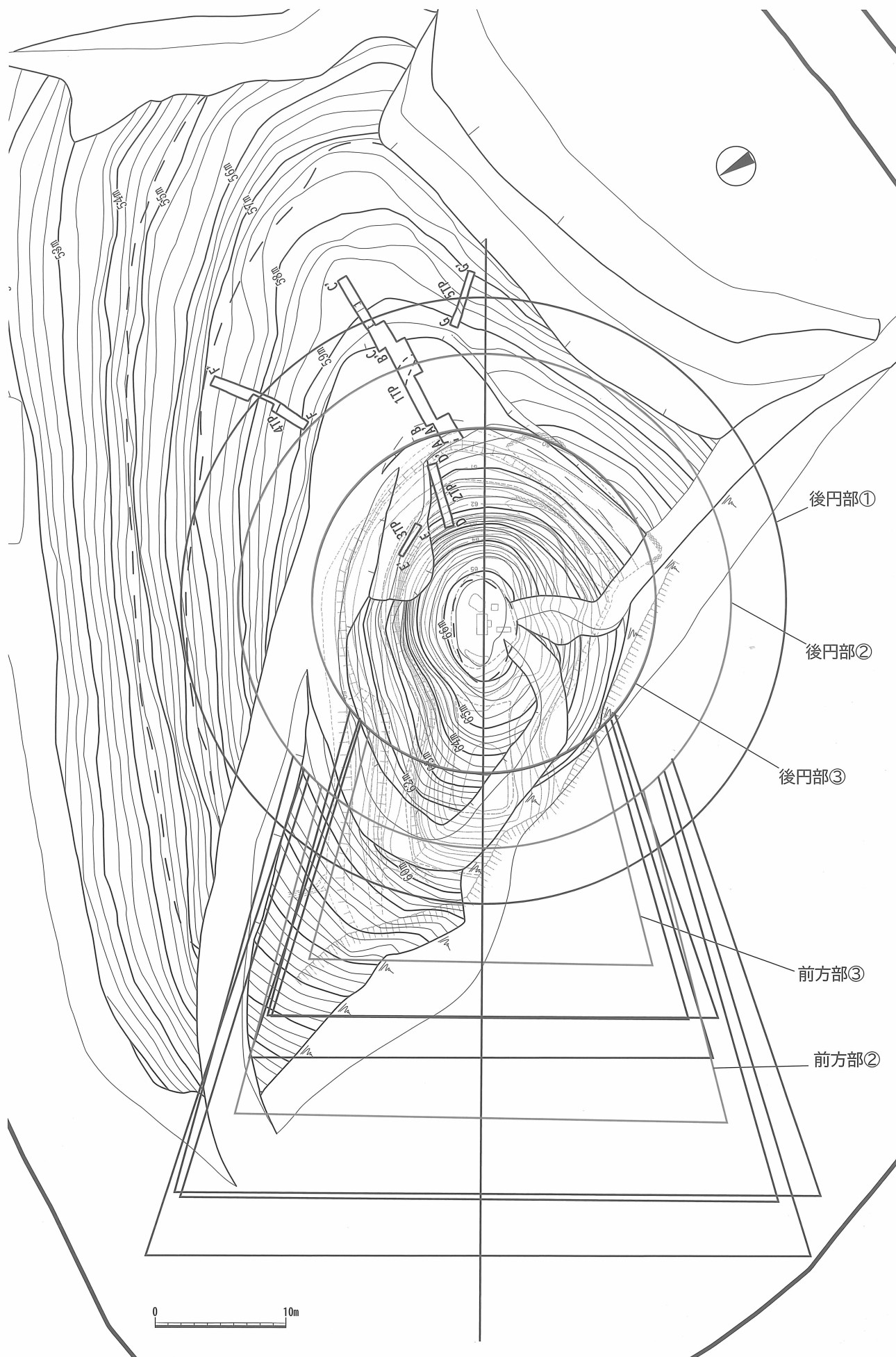
③茶臼塚 1 号墳の意義

茶臼塚 1 号墳が位置する矢部川以南では 6 世紀に多数の円墳が存在する中で、本古墳のみが前方後円墳である。本古墳の規模は墳長 40m 以上で、最大で墳長 58m の可能性がある。矢部川を挟んで八女丘陵を視認できる立地や、前方部の方向、出土人物埴輪の表現に加え、前方部形状の類似性から八女古墳群との関係を考える上でも本古墳は重要であると言える。

周辺には未調査の古墳が複数存在しており、今後、内容確認調査を行うことで八女市域の矢部川以南における古墳の系譜等を明らかにする必要がある。

【参考文献】

- ・川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-4 日本考古学会
- ・川述昭人編 1984 『大塚古墳』立花町文化財調査報告書第 1 集 立花町教育委員会
- ・小嶋篤 2008 「九州古墳時代後期の埴輪生産」『後期古墳の再検討』第 11 回九州前方後円墳研究会



第 10 図 茶臼塚 1 号墳墳丘復元図 (S = 1/400)

第1表 茶臼塚1号墳出土遺物観察表

挿図 番号	出土 地点	器形	焼成	色調 (外面 内面)	胎土	成形・整形手法等	寸 法		備考 (残存等)	実測図 番 号
							口徑 底徑	残存高		
第7図 1	1TP -D	埴輪 円筒	軟質	橙 / 黄橙	7ミリ以下の小石 (片岩・ 石英) を含む。	外面: タテ方向のハケメ、突帯貼付後ヨコナデ 内面: 指頭圧痕、ナデ	(27.8)	(10.8)	口縁部～突帯部 1/4 突帯断面 M 字状、突帯突出 6 ミリ。 器表面は摩耗と植物根により激しく劣化する。	R-9
第7図 2	1TP -C	埴輪 円筒	軟質	橙 / 橙	6ミリ以下の石英・片岩を 多く含む。赤色粒を少量含 む。	外面: 突帯貼付後ナデ 内面: 摩滅	—	—	突帯を有する胴部破片 突帯断面台形、突帯突出 4 ミリ。 器表面は劣化している。	R-6
第7図 3	1TP -C	埴輪 円筒	軟質	浅黄橙 / 橙	4ミリ以下の片岩・石英を 含む。	外面: ハケメ、突帯貼付後ヨコナデ 内面: ハケメ	—	—	突帯を有する胴部破片 突帯断面台形、突帯突出 8 ミリ。	R-5
第7図 4	1TP -C	埴輪 円筒	軟質	浅黄橙 / にぶい橙	4ミリ以下の長石・片岩を 多く含む、角閃石を少量含 む。	外面: 突帯貼付後ナデ 内面: ハケメ	—	—	突帯を有する胴部破片 円形透孔。突帯断面台形、突帯突出 5 ミリ。 器表面は摩耗している。	R-7
第7図 5	1TP -A	埴輪 円筒	軟質	橙 / 橙	7ミリ以下の小石 (片岩・ 石英) を含む。	外面: タテ方向のハケメ、突帯貼付後ヨコナデ 内面: ナデ	—	—	突帯を有する胴部破片 円形透孔。突帯断面 M 字状、突帯突出 8 ミリ。 透孔穿孔時にはみ出した粘土を切り取る。 器表面が風化している。	R-1
第7図 6	1TP -C	埴輪 円筒	軟質	橙 / 橙	5ミリ以下 (一部2センチ 以下) の石英・長石を含む。	外面: タテ方向のハケメ、突帯貼付 内面: ハケメ後ナデ、指頭圧痕	—	—	突帯を有する胴部破片 円形透孔。突帯断面 M 字状、突帯突出 6 ミリ。 透孔穿孔時の工具の痕跡あり。透孔以外の孔がある。 器表面が摩耗している。	R-4
第7図 7	1TP	埴輪 円筒	軟質	橙 / にぶい橙	3ミリ以下の石英・片岩を 含む。	外面: タテ方向のハケメ、突帯貼付 内面: ハケメ	—	—	突帯を有する胴部破片 突帯断面 M 字状、突帯突出 5 ミリ。円形透孔。 透孔穿孔時、複数回工具を当てた痕跡がある。	R-13
第7図 8	1TP	埴輪 円筒	軟質	にぶい橙 / にぶい橙	4ミリ以下の石英・長石・ 片岩を含む。	外面: タテ方向のハケメ、突帯貼付 内面: 調整不明	—	—	突帯を有する胴部破片 突帯断面 M 字状、突帯突出 6 ミリ。 器表面は風化と植物根で劣化している。	R-12
第7図 9	1TP	埴輪 円筒	軟質	にぶい橙 / 橙	3ミリ以下の石英・片岩・ (黒色片岩) を含む。	外面: 突帯貼付後粗いナデ 内面: 板状工具によるナデ	—	—	突帯を有する胴部破片 突帯断面台形、突帯突出 6 ミリ。最下段か。 器表面は摩耗している。	R-14
第7図 10	1TP	埴輪 円筒	軟質	浅黄橙 / 浅黄橙	3ミリ以下の石英・片岩を 含む。	外面: 突帯貼付後ナデ 内面: 板状工具によるナデ	最大径 (20.0)	(7.4)	突帯を有する胴部破片 1/5 外面に突帯の一部が残存している。 突帯扁平 (最下段)、突帯突出 4 ミリ。	R-11
第7図 11	1TP -D	埴輪 円筒	軟質	橙 / 橙	6ミリ以下の小石 (石英・ 長石・片岩) を含む。	外面: 板状工具による強いナデ 内面: 指によるナデ、指による押さえ。 底部調整あり	(18.0)	(16.3)	底部 1/4 器表面は激しく摩耗し、ハケメの痕跡は残存しない。	R-10
第8図 1	表採	埴輪 円筒	軟質	橙 / 橙	3ミリ以下の石英・片岩・ 赤色粒を含む。	外面: タテ方向のハケメ 内面: ハケメ	(28.6)	—	口縁部 1/8 内外面に摩耗を受けている。	R-29
第8図 2	表採	埴輪 円筒	軟質	にぶい橙 / 橙	4ミリ以下の石英・片岩・ 黒色片岩を含む。	外面: タテ方向のハケメ 内面: 指頭圧痕	最大径 (21.4)	—	胴部破片 円形透孔。上下両端が粘土継ぎ目で剥離する。	R-25
第8図 3	表採	埴輪 円筒	軟質	橙 / にぶい橙	2ミリ以下の石英・長石・ 片岩を含む。	外面: タテ方向のハケメ、突帯貼付後ヨコナデ 内面: ハケメ	—	—	突帯を有する胴部破片 突帯断面台形で角が立ち、幅がやや狭い。 突帯突出 6 ミリ。	R-31
第8図 4	表採	埴輪 円筒	軟質	橙 / にぶい橙	4ミリ以下の石英・片岩・ 赤色粒を含む。	外面: 突帯貼付後ヨコナデ 内面: タテ方向のハケメ	—	—	突帯を有する胴部破片 突帯断面台形、突帯突出 7 ミリ。 器表面は摩耗を受けている。	R-27
第8図 5	表採	埴輪 円筒	軟質	にぶい橙 / にぶい橙	3ミリ以下の石英・片岩・ 赤色粒を含む。	外面: 劣化により調整不明 内面: タテ方向のハケメ	—	—	突帯を有する胴部破片 突帯断面台形、突帯突出 8 ミリ。円形透孔。 透孔穿孔時にはみ出した粘土を指で整えている。	R-18
第8図 6	表採	埴輪 円筒	軟質	橙 / 橙	1ミリ以下の片岩・石英を 含む。	外面: タテ方向のハケメ、突帯貼付後ヨコナデ 内面: ハケメ	最大径 (22.6)	(10.7)	突帯を有する胴部破片 1/3 突帯断面形は角が立つ台形で、突帯突出 8 ミリ。 県表採分。突帯下側の接合がナデ消せていない。	R-22
第8図 7	表採	埴輪 円筒	軟質	にぶい橙 / にぶい橙	3ミリ以下の石英・長石を 含む。	外面: タテ方向のハケメ、突帯貼付後ヨコナデ 内面: 工具による強いナデ後ヨコナデ	—	—	突帯を有する胴部破片 県表採分。突帯断面台形、突帯突出 6 ミリ。	R-24
第8図 8	表採	埴輪 円筒	軟質	にぶい橙 / にぶい橙	5ミリ以下の石英・片岩を 含む。	外面: ハケメ後に割付、突帯貼付 内面: 指ナデ	最大径 (21.8)	(6.1)	突帯を有する胴部破片 1/4 県表採分。突帯の割付線が残る。突帯扁平 (最下段)。 突帯突出 6 ミリ。突帯上下端の押さえが甘い。	R-23
第8図 9	表採	埴輪 円筒	軟質	にぶい橙 / にぶい橙	3ミリ以下の石英・片岩・ 赤色粒を含む。	外面: 突帯貼付後ナデ 内面: 指頭圧痕	—	(8.5)	突帯を有する胴部破片 突帯扁平 (最下段)、突帯突出 2 ミリ。 突帯幅が不定。突帯の粘土継ぎ目がある。 器表面が摩耗する。	R-30
第8図 10	表採	埴輪 円筒	軟質	浅黄橙 / 浅黄橙	4ミリ以下の石英・長石を 含む。	外面: タテ方向のハケメ、突帯貼付後に押圧技 法 内面: タテ方向のハケメ	—	—	突帯を有する胴部破片 突帯扁平 (最下段) と思われる。	R-28
第8図 11	表採	埴輪 円筒	軟質	浅黄橙 / 浅黄橙	5ミリ以下の石英・片岩・ 褐色粒を含む。	外面: ナデ 内面: タテ方向のヨコナデ 底部調整あり	—	—	底部破片 器表面は激しく摩耗している。	R-16
第8図 12	表採	埴輪 円筒	軟質	にぶい橙 / にぶい橙	4ミリ以下の片岩・石英・ 赤色粒を含む。	外面: ナデ 内面: ナデ、指頭圧痕	—	—	底部片 県表採分。口縁部の可能性もあるが、底部とした。	R-26
第8図 13	後円部 表採	埴輪 円筒	軟質	にぶい褐 / にぶい橙	概ね4ミリ以下、一部9ミ リ以下の石英・片岩 (黒色 片岩) を含む。	外面: タテ方向のハケメ 内面: 指による押さえ後にナデ 底部調整あり	(16.4)	(15.0)	底部 1/8 器表面は劣化気味である。 タテ方向の粘土継ぎ目が内面に残る。	R-20
第8図 14	表採	埴輪 円筒	軟質	にぶい橙 / にぶい橙	5ミリ以下 (一部1セン チ) の片岩・石英を含む。	外面: タテ方向のハケメ 内面: ナデ 底部調整あり	16.4	(13.6)	底部 2/3 底面には平坦な場所に置いた痕跡がある。	R-19
第8図 15	後円部 表採	埴輪 円筒	軟質	にぶい橙 / にぶい橙	4ミリ以下の石英・片岩を 含む。	外面: タテ方向のハケメ、板ナデ後ナデ 突帯貼付後、押圧技法 内面: ハケメ 底部調整あり	(18.8)	(17.0)	底部～2段目透孔 1/4 円形透孔。突帯形状は扁平。突帯に粘土継ぎ目あり。	R-21
第9図 16	5TP 表土層	土師器?	軟質	橙 / 橙	3ミリ以下の石英・片岩・ 角閃石を含む。	外面: ハケメ、ナデ 内面: ナデ	—	—	破片 硬く焼け、胎土に砂粒を多く含む。 端部が赤化し、被熱の可能性ある。	R-15
第9図 17	1TP -A	土師器 高環?	軟質	にぶい黄橙 / にぶい黄橙	5ミリ以下の長石・石英を 含む。	内外面: ナデ	—	—	破片 屈曲部の小破片	R-2
第9図 18	東側斜 面 表採	須恵器 甕?	硬質	にぶい橙 / 灰	緻密だが、2ミリ以下の砂 粒を含む。	外面: 調整不明 内面: 同心円文タタキ	—	—	小破片 頸部付近の破片の可能性ある。	R-17
第9図 19	1TP -B	須恵器 甕?	硬質	黒 / 灰褐	緻密でわずかに白色粒を含 む。	外面: 格子目タタキ 内面: 同心円文タタキ	—	—	破片 外面に粘土紐の輪痕みあり	R-3
第9図 20	1TP -C	須恵器 甕?	硬質	灰 / 灰	緻密	外面: タタキ 内面: ナデ	—	—	胴部破片	R-8

版 圖

図版1 茶臼塚1号墳の立地



(1) 茶臼塚1号墳の立地（北西より）



(2) 茶臼塚1号墳の立地（南西より）

図版2 茶臼塚1号墳の全景・墳丘周辺



(1) 茶臼塚1号墳全景（写真上が北）



(2) 北西崖面部分（南西より）



(3) 南西石垣部分（南より）



(4) 調査前風景（南東より）



(5) 調査前風景（東より）

図版3 茶臼塚1号墳1TP①



(1) 1TP 西側掘削状況 (東より)



(2) 1TP 西端 (1TP-A) (東より)



(3) 1TP 西端北壁土層 (南より)



(4) 1TP 西側北壁土層 (南東より)



(5) 1TP 石列部分 (南西より)



(6) 1TP 東端掘削状況 (東より)

図版4 茶臼塚1号墳1TP②



(1) 1TP 東端埴輪出土状況（南西より）



(2) 1TP 溝北壁土層（南東より）

図版 5 茶臼塚 1 号墳 2 TP



(1) 2TP 全景 (北東より)



(2) 2TP 東端岩盤部分 (北より)



(3) 2TP 西側部分 (東より)



(4) 2TP 西側土層 (北より)

図版6 茶臼塚1号墳3TP・4TP



(1) 3TP 石列 (南より)



(2) 3TP 石列 (北より)



(4) 4TP 全景 (北東より)



(3) 3TP 土層 (東より)



(5) 4TP 全景 (北西より)



(6) 4TP 西端南壁土層 (北東より)



(7) 4TP 東端南壁土層 (北東より)

図版 7 茶臼塚 1 号墳 5 TP



(1) 5 TP 全景 (南東より)



(2) 5 TP 全景 (南より)

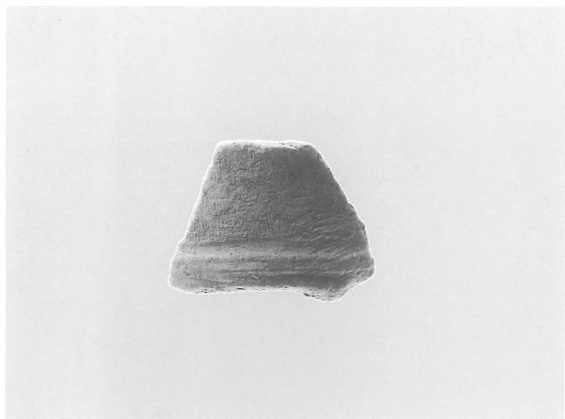


(3) 5 TP 東壁土層 (南西より)



(4) 5 TP 東壁土層 (南西より)

図版8 茶臼塚1号墳出土遺物①



(1) 1TP-D 第7図1



(2) 1TP-C 第7図2



(3) 1TP-C 第7図3



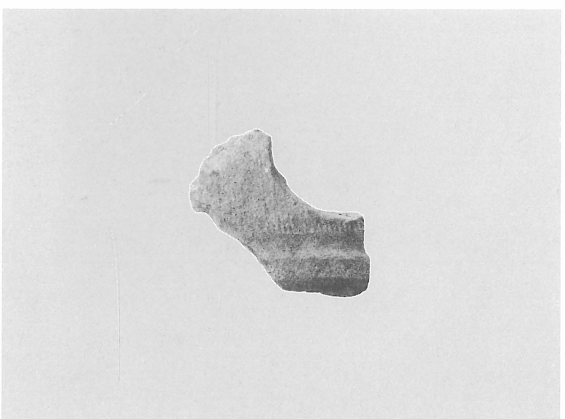
(4) 1TP-C 第7図4



(5) 1TP-A 第7図5



(6) 1TP-C 第7図6



(7) 1TP 第7図7

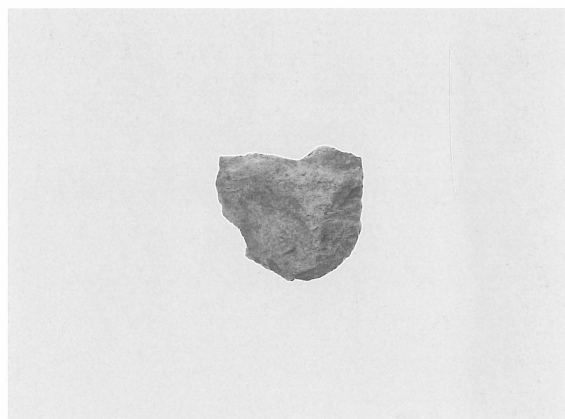


(8) 1TP 第7図8

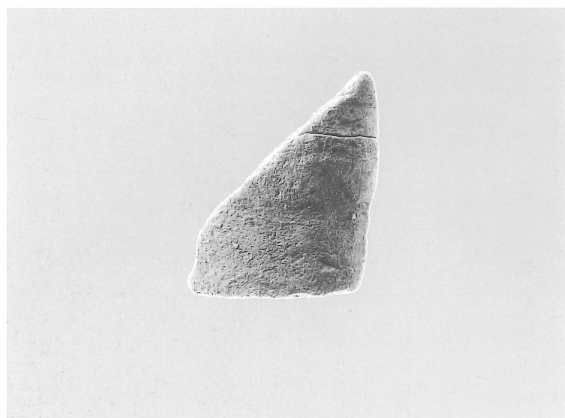
図版9 茶臼塚1号墳出土遺物②



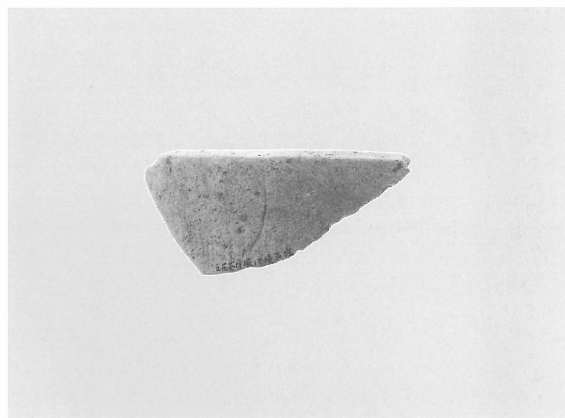
(9) 1TP 第7図9



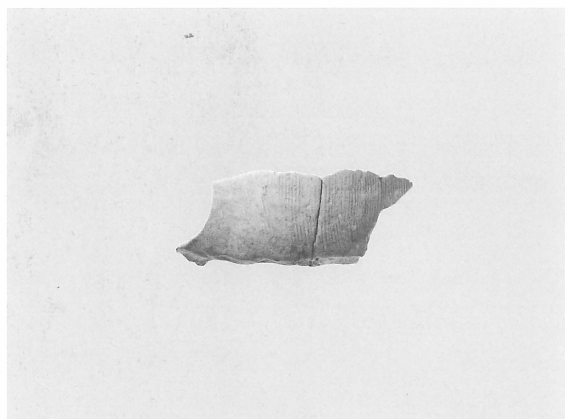
(10) 1TP 第7図10



(11) 1TP-D 第7図11



(12) 表面採集 第8図1



(13) 表面採集 第8図2



(14) 表面採集 第8図3

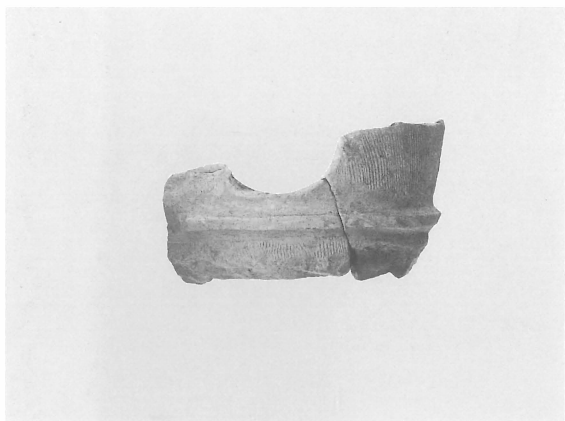


(15) 表面採集 第8図4

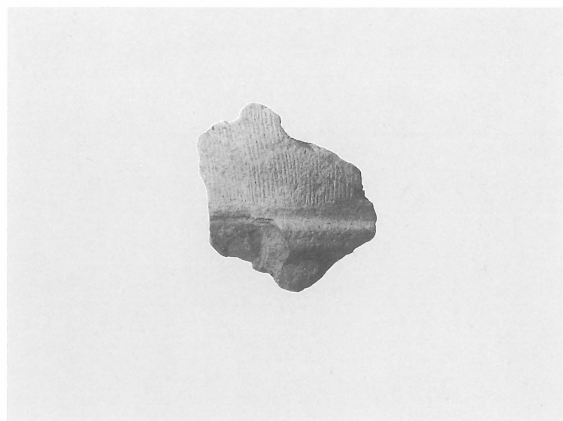


(16) 表面採集 第8図5

図版 10 茶臼塚 1 号墳出土遺物③



(17) 表面採集 第 8 図 6



(18) 表面採集 第 8 図 7



(19) 表面採集 第 8 図 8



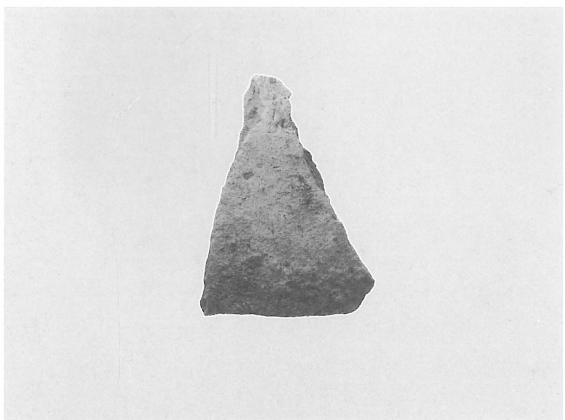
(20) 表面採集 第 8 図 9



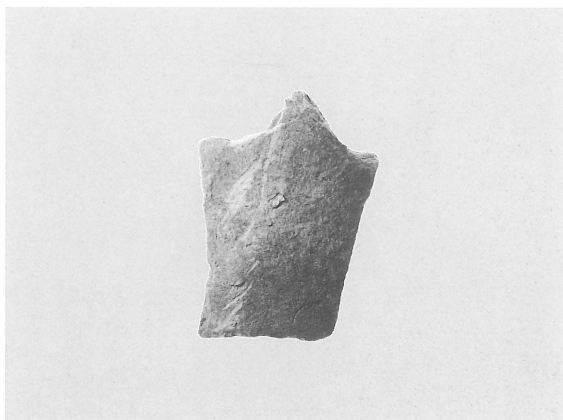
(21) 表面採集 第 8 図 10



(22) 表面採集 第 8 図 11

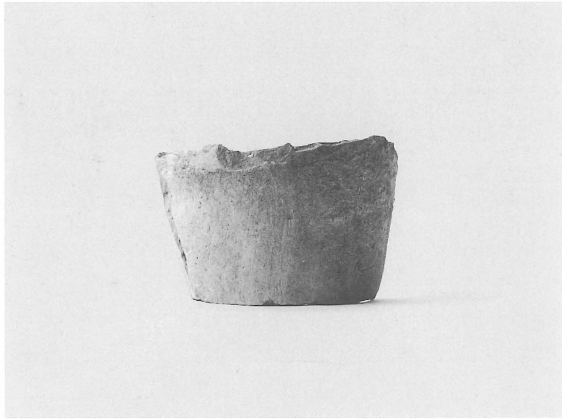


(23) 表面採集 第 8 図 12

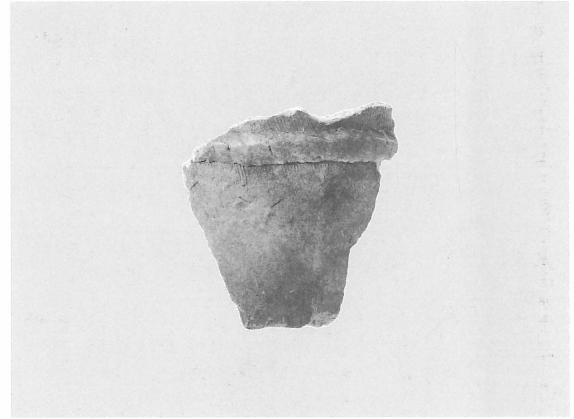


(24) 後円部表面採集 第 8 図 13

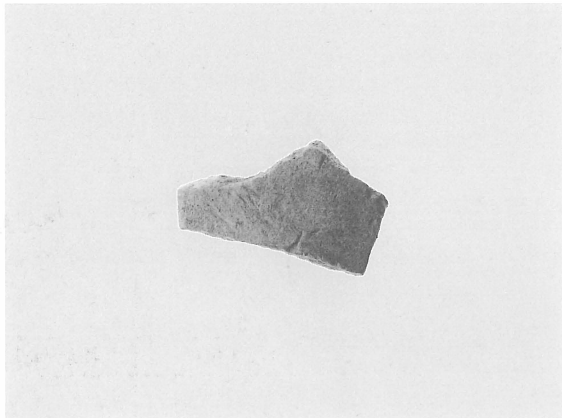
図版 11 茶臼塚 1 号墳出土遺物④



(25) 表面採集 第 8 図 14



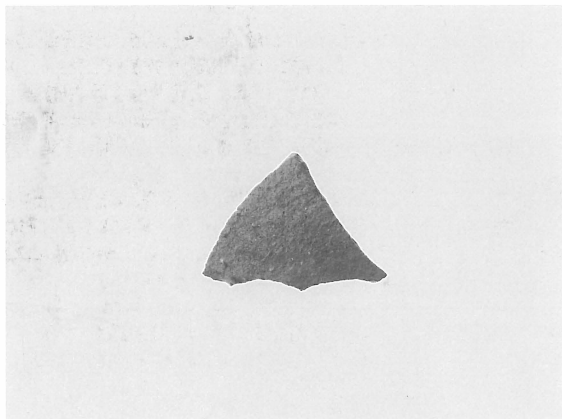
(26) 表面採集 第 8 図 15



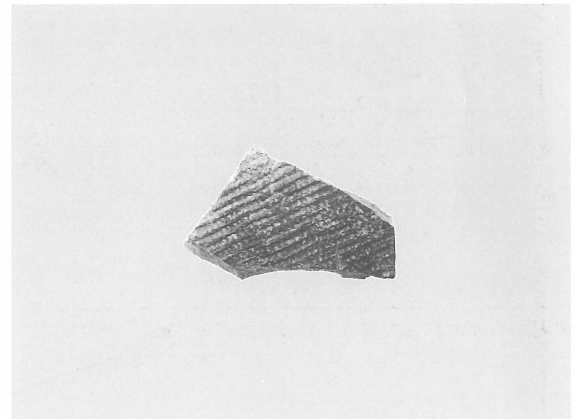
(27) 5 TP 表土層 第 9 図 16



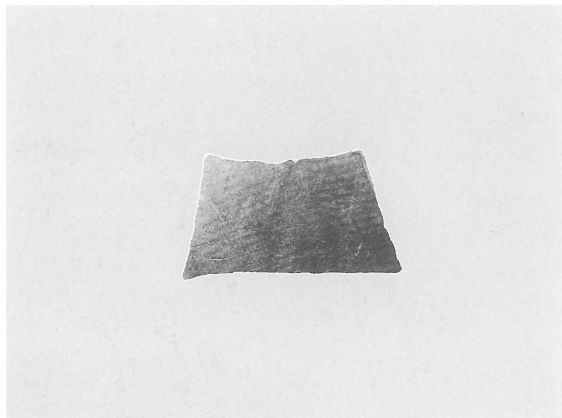
(28) 1 TP-A 第 9 図 17



(29) 東側斜面表面採集 第 9 図 18



(30) 1 TP-B 第 9 図 19



(31) 1 TP-C 第 9 図 20

報告書抄録

ふりがな	ちやうすづか1ごうふん							
書名	茶臼塚1号墳							
副書名	福岡県八女市立花町北山所在古墳の確認調査報告書							
巻次								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ号	第139集							
編著者名	甲斐 郁（かい ふみ）							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	〒 834-8585 福岡県八女市本町 6 4 7 TEL. 0943-23-1982 FAX. 0943-24-4331							
発行年月日	西暦 2023（令和5）年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ちやうすづか1ごうふん 茶臼塚1号墳	ふくおかけんやめし 福岡県八女市 たちばなまちきたやま 立花町北山 あざちやうすづか 字茶臼塚	20054	720003	33° 12' 43"	130° 33' 42"	20170626 ～ 20220331	約 6491 m ²	確認調査
所収遺跡	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
茶臼塚1号墳	古墳	古墳時代		溝状遺構		埴輪・土師器・須恵器		
要 約	茶臼塚1号墳は八女市域の矢部川以南で確認できる唯一の前方後円墳である。近年、周辺地形の改変が進んだことを受け、古墳保存のための範囲内容確認を目的とし、測量調査および試掘・確認調査を実施した。 測量調査では墳丘を含めた広範囲の、現況地形観察と測量図作成を行った。この測量調査の成果を踏まえ、墳丘東側に試掘坑を設定し試掘・確認調査を実施した。その結果、墳丘に積み土と岩盤削り出しを行う箇所を確認し、岩盤層の傾斜変換点から東に延びる平坦面を確認した。その他、試掘坑で溝状遺構を確認し、埋土から多数の円礫とともに円筒埴輪破片が出土した。 本古墳は前方部形状が失われているため、過去の測量図および周辺古墳の前方部形状を参考に墳丘復元を試みた。その結果、茶臼塚1号墳は後円部径 26 m、前方部長 17 m、前方部幅 26 m、墳長 40 mであるが、最大規模をとれば後円部径 37 m、前方部長 25 m、前方部幅 38 m、墳長 58 mあったと推測される。溝状遺構は古墳に伴う可能性が高いが、古墳全体に巡っていなかったものと思われる。							

※座標は世界測地系による。国土地理院ホームページの地図検索システムより得たものであり、基準点測量によって得た値ではない。

茶臼塚 1 号墳

八女市文化財調査報告書

第139集

令和5年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647
印刷 (株) 東兄弟
八女市祈祷院563